

騙されないための経験知をインプットしよう!

佐藤直行

ハートライフ病院 総合内科

医学の中で、私が“ゲシュタルト”という言葉に初めて出会ったのは、2013年に発行された『診断のゲシュタルトとデギュスタシオン』¹⁾(金芳堂)を手にとった時でした。当時、わりと厳しい病院の研修医だった私は、コモンな疾患ですら診断するのに難渋する



日々を過ごしており、「医学の中に数多ある疾患をうまく診断できるようになる日など来るのだろうか…」と途方に暮れていました。忙しい臨床現場でも自分で経験できる疾患には限りがあり、その少ない経験だけではうまく疾患を見抜く眼はなかなか養われません。研修医であれば尚更で、未熟者だった私は、さまざまな非典型的な臨床像に簡単に騙されていました。「この症状からこの疾患を想起するのか…」と悔しい思いをしていた頃に出合ったその名著には、great physicianである高名な先生方の豊富な経験知が詰め込まれていました。great physicianがどのように疾患を見抜いているのか、経験を通してしか身に付けられないはずの「疾患の全体像(ゲシュタルト)を捉えるための見識」が散りばめられた内容に、私は強い衝撃を受けたものです。まさに「巨人の肩の上に乗る矮人^{*}」の感覚でした。

とはいえその後も、臨床をやればやるほど、疾患の取りうる臨床像の幅の広さに驚かされると共に、未だに臨床の奥深さを実感し続ける日々です。以前よりも騙されにくくなったとは感じていますが、その要因の1つとして、疾患が騙してくる時の“化け方”にはゲシュタルトがあり、経験知としてのストックが増えてきたことが挙げられます。その“化け方”とは、最近で言うところの「カメレオン」にあたるのでした。診断学の領

域で「ミミック」という言葉がよく使われるようになりましたが、「カメレオン」という概念は、ある疾患がとりうる臨床像の幅を認識することにも役立ちます。ミミックもカメレオンも、偉大な先人たちの叡智の結晶であり、騙されないための大切な教訓を含んでいますが、カ

メレオンのほうはまだあまり認知されていません。

そこで本特集では「よくある騙され方のゲシュタルト」のコンセプトのもと、さまざまな臨床像をとりうるコモンな疾患をうまく見抜き、診断できるようになるため、臨床現場の第一線で活躍されている先生方に、各疾患で騙されやすくなる状況や厄介なカメレオン疾患について解説いただきました。また、疾患の臨床像の幅を“見える化”するための「カメレオンチャート」も経験ベースで作成いただいています。読者の方が感じている頻度とは若干のズレがあるかもしれませんが、診療するセッティング(施設規模や診療科など)によって遭遇しやすい臨床像が変わるのは“あるある”なので、立場の違いで疾患の捉え方が変わることも楽しんでいただければと思います。どの解説もクリニカルパールと経験知が満載で、「疾患の捉え方の幅が広がること間違いなし!」と自信を持ってお届けします。よくある騙され方のゲシュタルトをインプットしていただき、次に現場で出会うカメレオンな疾患たちを巨人の肩の上から見抜いていただければ幸いです。 **G**

^{*}先人たちの偉大な業績の積み重ねの上に現在の学問や技術があり新たな発見がある、ということを表現した隠喩。Google Scholarのトップページにも掲げられている。

文献

- 1) 岩田健太郎(編): 診断のゲシュタルトとデギュスタシオン. 金芳堂、2013.